コラム

年度初めからの学級経営

2007.４月

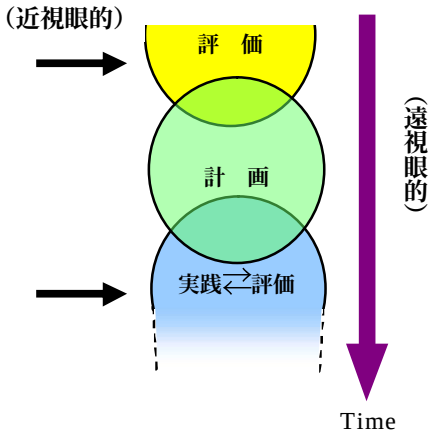
新しいスタッフを迎え，新しい年度が始まった。転勤はかなりのエネルギーを費やすが，考え方を変えれば新しい出会いや発見が互いに期待できる楽しみがある。

今年度は4月9日が始業式であったが，子どもたちとどんな出会いをされただろうか。子どもたちは体育館での担任発表を経て，教室で担任を待っている。この出会いは，この1年間のスタートの対面であり，学級開きとしての重要な意味を持つ。担任として，どんな言葉でどんな話をされたであろうか。子どもたちは担任にどんな印象をもったであろうか。また，この初めての出会いでどんな事実をつかまれたであろうか。

学級開きをした日から1～2週間は，これからの1年間の学級経営を考えれば非常に重要な時期である。この間にすることは，まず子ども一人ひとりとの丁寧な出会いを通して，一人ひとりの存在を確認することである。しかし，焦らないことである。どうしてもこの時期のかかわりは，教師対学級全体･全員となることが多いからである。担任としては，一人ひとりを***じっくり･たっぷり見取る（評価）***という姿勢を維持し，子どもたちから分かってきたことをカルテに記入したい。見取ろうとしない限りは，子どもの内面は見えてこないものだ。また，昨年度の子どもの育ち(成果)や履歴も重視したい。昨年度から同校に勤務しているものであれば，多少の情報は得られているだろうが，つなぎの資料である**子ども一人ひとりのカルテ**が有効である。ぜひ，作成してほしいものである。

次に担任として行うことは，見取った***この子どもたちを自分はどう育てたいのか（計画）***を明確にすることである。その際に留意することは，担任だけの勝手で計画を立ててはまずい。学校教育目標･発達段階，子どもの思いと教師の願いなどを考えて，決定することである。しかし，この決定材料には，実は忘れてはならないものがある。それは，これまでの学級経営を継続するか否かという問題である。前担任と子どもたちが創り上げた学級文化をどうするかである。子どもの側からすれば，この“つなぐ学級経営”は，妙なストレスから解放されるものであり，期待されるものであろう。

担任としては，日々の子どもたちの成長を見取りながら，どのようにこれから育んでいくか，近視眼的に見ながら，遠視眼的に考えていく見方や考え方を忘れないでいたい。　　（芝）



4月の学級経営の基本的な考え方

子ども一人ひとりの成長を記録･蓄積する。(近視眼的な見方)

眼前の子どもをどのような子どもに育てるか。（遠視眼的な考え方）